ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと〝風〟

第204号（２０２４年１月）冬号
（会報発行月：1・4・7・10月）

新年あけましておめでとうございます。

本会報も２００６年６月に「ふるさとルネッサンスの会」としてスタートし、今年18回目の正月を迎えることが出来ました。これも本誌を読んでいただいている多くの皆様の声援に後押しをして頂いているおかげです。感謝を申し上げます。今年初めに能登半島大地震や羽田空港飛行機事故など続けて発生し、波乱な幕開けとなりましたが、本会では、ふるさと（霞ケ浦を中心とした周辺地域）の歴史や文化の再発見を見据えて情報発信をしてまいります。どうぞよろしくお願い致します。

常世の風に吹かれて呟いて（10）白井啓治

（故白井啓治氏の９年前（２０１５年）の記事から一部を抜粋して連載します。）

・初春の雪空に何を思うか　雀二羽きたる

昨年末に懐かしい文を目にした。

『自分の国だから我々は日本を批判するのだ。批判するのはよりよい日本をつくるためなのだ。批判の無いところに未来はない。無批判に日本の良さなどというのはナルシズムだ。鏡の中の自分の顔をながめていい気分になっているような馬鹿と同じだ』

羽仁五郎の文である。

６０年安保騒動後、文学者の戦争責任等と合わせて多くの本が出版され、私も随分と読み漁り、影響もうけたり反発を持ったりしたことを今では懐かしく思い出す。

フェイスブックの仲間がシェアした文にこれを見つけた時に、青春の頃の懐かしさに合わせて、これは今こそ我々がもう一度声を大にして言い直すことが必要なのではないかとの思いに駆られた。

（絵：兼平智恵子）

フェイスブックにもう一つ文が紹介されていた。写真家福島菊次郎氏の言葉なのだろうか、「勝てなくとも抵抗して未来のために一粒の種でもいいから蒔こうとするのか、逃げて再び同じ過ちを繰り返すのか…」である。

小生、一輪の花しか咲かなくてもいいから、美しい花を咲かせたいとは常々思い願い、その努力を惜しまないようにしている。舞台に一輪、綺麗な花を咲かせてみたいと、絶筆したはずの筆をとり直し、常世の国の恋物語百に挑戦を始めたのであるが、百には未だまだ先が長そうである。しかし、途中で折れたとしても種さえ蒔いておけば誰かが後に続くだろうと思っている。

年の明けて元日。

何となく雪のちらつきそうな天気。お猫様を抱いて庭に出て思った。

『老いた頭で年の初めに何を願う　梅の蕾はかたく』

この季節の梅の蕾同様に小生の頭も年々柔軟性を失い硬くなっていく。困ったことに喜怒哀楽の感性に中間の層が狭くなり、白か黒か、快か不快かの表裏になってきたように思う。白と黒とグレーの正三角形であった筈の思考感覚がグレーの辺の長さがうんと縮まってきて鋭利な二等辺三角形になってきた。

（次ページへ続く）

ふるさと風の会会員募集中！

当会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間達を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、1・4・7・10月初めに会報作りを兼ねた懇親会と各月末に雑談：勉強会を行っております。

会費は月額1,500円。（会報印刷等の諸経費）

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

木下明男　090-4715-5527　兼平智恵子　0299-26-7178
伊東弓子　0299-26-1659　木村　進　080-3381-0297
編集事務局　〒315-0014　石岡市国府4-3-32（木村）
HP　http://www.furusato-kaze.com/

異常、異常と言われていても、早まったり遅れたりしながらも四季という時は確実に巡って来る。庭の蕗の薹も陽気に添ってほっこり膨らんだり止まったりしながら春を窺がっている。梅の木に頻繁にメジロが訪れチチッと鳴くと硬い蕾が鳴声に呼応するようにほっこりとしてくる。
ひきかえ人間社会は日々に、年々に殺伐としてくるように思え、末法思想だとか人類生滅論などが切実さを持って迫ってくる。
人は三人集まると派閥が生れ対立が生れると言われるが、人口の密集しすぎた人間社会には、種が滅びるまで対立と闘争が無くなることはないのだろう。世界中で起きている無為な諍いを見ていると、協調や助け合いとは単なる言葉だけでしかないように思えてしまう。
今年は戦後７０年を迎える。我が国の戦後７０年に先立ち、1月27日アウシュビッツ解放７０年を迎えた。

言葉を考えなくなった時、詩がうまれる。
言葉を考えると説明が顔を出す。
言葉は、真実は伝えない。言葉が伝えるのは事実だけ。真実とは事実と事実の隙間にひっそりと隠れてある。言葉で真実を伝えようとするな。真実を心に籠めて、確かな事実の言葉を紡いでいった時、言葉と言葉の隙間から真実が顔を出す。
言葉で真実を伝えようとすればするほど真実は遠ざかっていく。

あの年の夏も暑かった。
もう限界だと思った。
限界の夏に止めを刺したのが広島、そして長崎。
やっと終焉が来た。
そして絶望の中に希望を見ることができた。

人生は（生の世は）はかないもの
だから己の人生は精一杯に生きなければ、はかなさが一層はかないものになってしまう
生滅に煩わされるな
我欲に溺れるな
心の愉快にこそ希望がある

人の世はしばし旅居の仮枕
仮の枕に欲の積めども
明日の希望のあるでなし（みるでなし）

・秋の虫が声する　時のいそいで使うなと
・風の声聞いて時の移ろいを愉しむ
・移ろう時に身を任せ今日の命を愉しむ
・移ろう時に生もなく滅びもなく愉快をおもう
・希望を愉しむは裡にありと風のいう
・野分を感じて寒蝉も天命の覚悟を知る
・移ろう時に身を任せ今日の命を愉しむ

芸術とは、対立する価値観を共存させ、真の自由を探せる手段である。
自然とは何でもありのことを言う。規則性があるようで規則性なんてない。規則性を求めて生きているのは、何でもありの自然の恐怖の中で、少しでも安心を得たいと想像した神の存在と同じだといえる。地球上で規則性を求めているのは高等と言われる生物だけである。下等とみなされる細菌などには規則性を求める活動はない。あくまでもファジーといえる。
地球の四季のあり様だって絶対とは言えないだろう。宇宙年の規模で見れば、何だって有りだろう。
実際、我々の生きている地上は、マグマの表皮に居るのだから、地球が自転している以上、薄っぺらな地表には皺寄って割れたり、中からマグマが海のように漏れ出てくることだって、色々あるだろう。それには周期なんてもので尺度することはできないだろうと思う。
地球年というか宇宙年から見ればおそらく規則性なんて糞くらえなのではないだろうか。

・ひと雨ごとに冬となってその先に春が居て
・みわたせば思ひ思ひにふる里の風
・ぐるっと見渡せばふるさとの風と景

この「ふるさと風」も、ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える、を軸にして、少人数ではあるがそれぞれが確りと物を言える会報でありたいと進めて来た。水にしろ風にしろ時にしろ流れるものには景がある。景とは姿と置き換えてもいいだろう。歴史というのも時という流れの景であり、伝統というのはその一つの姿であると言える。
その姿は真実と置き換えてもいいだろう。
時の流れの中で一つの確りとした景としての姿をなしたものが伝統という文化であろう。伝統という文化は、一つの芸術と言っていいだろう。
しかし、伝統が必ずしも芸術の域まで高まることは稀である。そして、芸術の域にまで達しえなかった伝統は、時の流れに洗われて消滅してしまう。
特にノスタルジーを伝統と錯覚して呼んでいるものは、その大半が、殆どが存在の色を失い消滅してしまう。

辰年の始めに

兼平智惠子

剣道をたしなむ次男家族と恒例の鹿島神宮初詣、そしてご先祖への挨拶（墓参り）の帰途に、突然五台のスマホが地震速報。新潟方面らしい。上越に住む長男家族は……。

七階のマンションは大揺れ、家具や食器類がガラガラ、ガチャガチャと…。命は大丈夫。一安心。またしても能登半島を中心に令和になって最大級の自然が猛威を振るいました。

被災されました皆様には謹んでお見舞い申し上げます。そして無念にも一瞬にして命を奪われてしまった皆様にお悔みを申し上げ、心よりご冥福をお祈りいたします。

被災者の皆様に一日も早く、暖かい住居と温かい食べ物と美味しい水が届きますようにと念じ、これから少しでもお役に立つよう応援したいと思っています。

被災者の皆様どうぞ助かったお命を大切に大切に前進して下さい。

ふるさと風の会ご愛読の皆様にはお元気で新しい年をお迎えの事と存じます。

昨年より年四回の発行となりましたが変わらずのご愛読を頂き有難う御座いました。今年もどうぞよろしくお願い致します。

辰年の今年は十二支では五番目、方位は東南東、辰の刻は午前七時を中心として七時～九時迄の二時間。

中国の『漢書　律暦志』では、辰は「ふるう、ととのう」を意味する「振」で、陽気が動いて万物が振動し、草木も　よく成長して形が整った状態を表すと解釈されている。

辰は本来の意味は竜で、それは変幻自在な霊力を有する瑞兆（めでたいしるし）の動物として、各種の器物や壁画にあらわされている。

また、諸説あって、辰は「二枚貝が殻から足(入水管と出水管)を出している」様子をかたどった文字である。また辰は「蜃」を指し、蜃とは蜃気楼をつくり出す想像上の生物でもあるとも言われている。

十二支の中で唯一想像上の生き物で権力や隆盛の象徴であることから、出世や権力に大きく関わると言われている。

二〇一一年三月十一日、東北、関東を未曾有の猛威が襲いました東北関東大震災。今年で十三年目に入ります。天災は忘れた頃にやって来る。その時に生まれた日本国民の「忍耐と努力」と支え合って助け合っての絆で能登半島中心の被災された地域の皆様が少しずつ、少しずつ明るい方に向かうようにみなさんと応援して行きたいと思います。

飛躍の年、竜の後押しも大いに期待します。

お知らせ

石岡市立ふるさと歴史館
第三五回企画展
令和六年一月十日、（水）～四月七日
午前十時～四時三〇分
月曜休館　入場無料

※石岡市立石岡小学校敷地内

現在解体中の旧石岡市民会館、屋根だけ見ることが出来る陣屋門の前を進み、右側に企画展の看板があります。そこを右側に進み、閉ざされた鉄の扉を開け校庭に駐車し、鉄の扉は閉めて頂いてご来館下さい。お帰りの際も扉を開け、出車し扉を閉めて頂きますようお願いいたします。徒歩でご来館の場合も鉄の扉の開閉をお願い致します。ご来館お待ちしております。

参考資料　暮らしの歳時記ガイド、十二支読本

○教えていたはずの孫に教えられ　　智惠子

我が人生の回想15

木下明男

ギター文化館誕生まで・・・④

ギター文化館誕生のきっかけ(理由)になった、スペインのフラメンコギタリスト「マヌエル・カーノ・タマーヨ（Manuel Cano Tamayo)」について紹介したい。２００５年に開催された、〝ギター製作展Ｉｎやさと〟の記念誌からの転載になります。

マエストロ〝Ｍ・カーノ〟は、１９２５年２月２３日にアンダルシアのグラナダの家庭に生まれた。その家庭は民謡に造詣が深く、父はフラメンコギターの愛好家、そして母はウードをよく弾いていた。６歳の時に祭りの露店で小さなギターを買って貰ったが、それはおもちゃだった。数年後祖父からホセ・ベルナスギターを与えられる。此の頃から父の指導の下、本格的にギターの勉強が始まる。直ぐに此のギターもカーノ少年には小さすぎてしまう。１９４０年父の知り合い、ニーニョ・リカルドから与えられた、ドミンゴ・エステソ（フラメンコギターの名器）を手にする。

カーノ少年は、父の仕事（揚水事業）を継ぐための教育として土木工学を専攻し、アンダルシア各地を巡る。商売と言う枠を超え、行く先々の土地で多くの人との触れ合いにより、各地の民謡に触れる。自分の耳で覚えた旋律をギターに移していった。この時期に得た多くの旋律や知識は、後に多くの作品を生み出す原動力となった。マドリードに在住の頃、グラナダ出身の作曲家「アンヘル・バリオス」と親交を重ね、彼の弟子であり後継者であると自覚をするようになる。実際に「アンヘル・バリオス」の晩年の作品の多くが、最高の演奏者である「マヌエル・カーノ」のために捧げられ書かれたことから、二人の関係の親密さを表している。１９５８年に、クラシックギターの神様と言われた「アンドレス・セゴビア」に会い、共に写した写真には「マヌエル・カーノへ、偽りの音楽的侵攻からフラメンコを救ってくれることを望む」と書かれており予言的であった。１９６４年、グラナダでの国際音楽舞踊祭で再会したと際、彼はカーノに「私が保証する、あなたは私に素晴らしい例を示してくれた、だからそのまま進みなさい、それがあなたの道」と言った。

１９５９年、ＲＣＡ社より《グラナダ組曲とフラメンコ》と題するＬＰを発表し、セビーリャとグラナダで初めての公開演会を開催し演奏活動を開始する。１９６３年録音のイスバボックス社《ラモン・モントヤの思い出》が翌年にヘレス市フラメンコ協会から大賞を受ける。１９６５年、コルドバ市で開催された第４回全国フラメンコ芸術コンクールで、優れたコンサート奏者に贈られる《サビーカス賞》を受賞。１９６８年、ヘレス市フラメンコ協会より《国家フラメンコ大賞》が贈られる。同時に海外への演奏活動も忙しく、ヨーロッパを初め、ソ連やアメリカ、中東、中南米、北アフリカで演奏を行う。更に１９７４年初めて日本を訪問した。その後、全国労音の招聘で１９８３年、１９８６年、１９８８年日本での全国公演があり、都合４回の来日を果たした。１９７８年よりコルドバ高等音楽院で、世界で初めてのフラメンコギター科教授として講座を持ち、７年後にグラナダ高等音楽院に移籍。１９８６年、コルドバ大学出版局から出された著書《ギター：その歴史と研究、フラメンコ芸術への寄与》(邦訳：フラメンコギターの歴史)は、ヘレス市フラメンコ協会より研究部門として、二回目の《フラメンコ国家大賞》を獲得した。そして、１９９０年1月１２日、急性心不全のため自宅にて逝去。

スペインの誇る、偉大なマエストロ「マヌエル・カーノ」は、日本のフラメンコ芸術の学者「浜田滋郎」氏により労音に紹介された。その後長きに亘り親交が続きます、高弟である吉川二郎氏により関係は深められた。１９８３年全国労音での招聘、５０回を超す全国での公演によりフラメンコギターを日本に広める役割を果たした。そして、全国労音と《浜田滋郎》氏と《吉川二郎》氏との親交が深まり、マヌエル・カーノ記念のギター文化館建設に大きな協力が得られた。

地域に眠る埋もれた歴史（92）

木村　進

【民俗芸能と祭り】（6）

染谷十二座神楽

石岡のおまつりの中日に総社宮で披露される「染谷十二座神楽」を紹介します。

この神楽はとても古く（４００年前頃？）から染谷地区に伝わる神楽で、毎年４月19日に（染

谷）佐志能神社で行なわれる行事です。市指定有形民族文化財となっています。

①猿田彦の舞、②長刀（なぎなた）つかい、③矢大臣、④剣の舞、⑤豆まき、⑥キツネの田うない、⑦種まき、⑧巫女舞、⑨鬼の餅まき、⑩みきの舞、⑪えびすの舞、⑫天の岩戸の12座です（1～4は四方固めと祓いの舞で1人舞いである）。

さて、この中のいくつかがお祭りの大祭に総社宮で披露されるのですが、この中に「巫女舞」と「天の岩戸」の2つに地元の小学生が出てきます。選ばれた子供は毎年地元の公民館で練習して大変だそうです。今回はここに焦点を当てて紹介します。とてもかわいらしく伝統を是非守っていってほしいものだと思います。

しかし子ー辰ー申生まれの子供から選ばれ4年間務めるようです。皆が見守る舞台に二人の巫女（小学生）が現れました。緊張した面持ちが見てとれます。十二座神楽の演目の「巫女舞」は2人の巫女が両手に鈴を持って、笛に合わせて舞います。背中に緊張感が・・・。

これはもうこちらが親か祖父さんの気持ちになっています。舞い終わって舞台を去りました。（小学生で選ばれ、4年間務めると卒業は中学生でしょうか。これを続けていくのは大変です）舞台のそでに引き揚げてからホッとした笑顔が何ともいえず、とてもかわいらしいです。

ではその他の十二座神楽を次に紹介します。

①猿田彦の舞、②長刀（なぎなた）つかい、③矢大臣、④剣の舞、⑤豆まき、⑥キツネの田うない、⑦種まき、⑧巫女舞、⑨鬼の餅まき、⑩みきの舞、⑪えびすの舞、⑫天の岩戸

の十二座ですが、この日は全部が披露されるとは言えないようです。

「天の岩戸」です。小学生の巫女も登場します。

続いて、「剣の舞」と「キツネの田うない」

「「鬼の餅まき」と「鬼の餅まき」です。

「矢大臣」と「えびすの舞」？

長刀（なぎなた）つかい

今も続く、平将門の信仰と崇り

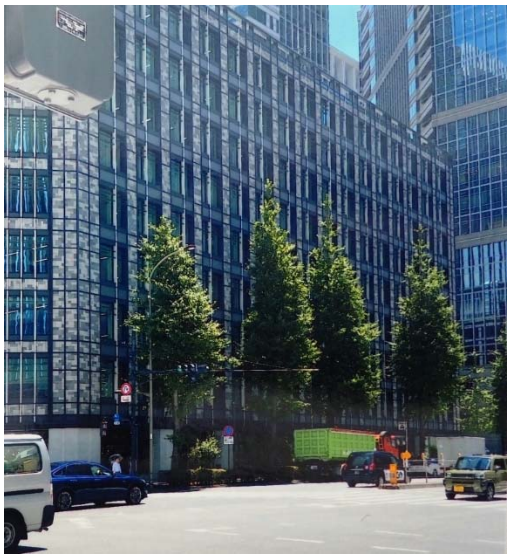
『平将門の怨霊』史観　西方保男

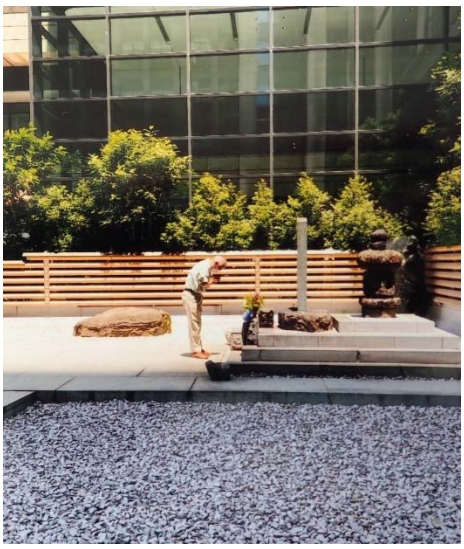
平安の時代から現代まで続く将門の怨霊話。怨霊や崇りなどというと、現代の人達からは、一笑に付されてしまうかも。ところがだ、現代日本を代表する世界的な一流企業の幹部役員をはじめ、エリート社員と思しき教養人？たちが、将門の怨霊に怯えている？という。

こんな話しを信じますか皆さんは？だがしかし事実なんですよ。では、お耳を汚すかもしれませんがお話し、致しましょうか。

ところは、東京は千代田区大手町一丁目一番地、皇居に目と鼻の先の場所にある。遥か平安の昔、時の朝廷に『反逆』した平将門の首が葬られている所で、東京都指定の旧跡となっている。皇居を間近に仰ぎ、周囲には大企業のビル郡が林立している真っ只中で、大手町合同庁舎、経団連会館、ＪＡビル、大手商社、生保、銀行等の企業ビル群に囲まれている。先頃、このエリアは、大手町一丁目大規模再開発事業により「Ｏｔｅｍａｃｈｉ　Ｏｎｅ」が竣工した。オフィスのＡ棟(地上31建)とホテル、商業施設のＢ棟(地上40階建)である。

私は、かつて、この附近のビルには、仕事の関係で何度も通った記憶が甦る、40年ほど前のことである。その折に思いを致したのは、こんなビジネスビル群の中心地に、悠久の時を経た今日、いまだ厳然とその存在を主張して止まない平将門なる塚の存在であった。





それは、冒頭に記した平将門の怨霊などという首を傾げたくなるような都市伝説次元の崇りの概念についてなのである？

さらに、将門の塚を取り囲むように存在している大企業の関係者の動静なのである。聞くところによると、この塚を囲むように存在する周辺企業のトップや社員が、新年には必ず参拝しているという。

さらなる驚きは、将門の塚に面した各ビルが、塚を見下ろすことになるからと、塚に面した窓をパネルで塞いで新しくタイル貼りにして塚が見えないようにしてしまったのである。実際に外部を塞がれたビル面を目にした私は、正直、本当なのかと目を疑って、思わず、その場にしばらく佇んでいた記憶を思い出す。

それだけに止まらず、さらに、これらビルの社内では、将門の塚に背中を向けた席の役員や社員が相ついで亡くなるという事態が起きたという。偶

然か否か、将門の塚との因果関係は不明なのだが。そのうちの代表的な企業の一つ、M社の役員室は、全部将門塚にお尻を向けないように設計されているという。さらに、同社の国家的大プロジェクトが崩れ去ったばかりか、その海外駐在の重要人物が大変な被害を受けた。(事実、これは、国際的な大事件だった)

つまり、エリートビジネスマンが平将門の霊力を信じ、恐れているということは間違いないようである。何をか況やである。

だが実際のことなのである。どういうことか、もう少し詳しく、この辺りの話しを東京商船大学茂在寅男教授の著書を参照しよう。

震災復興の気運に大蔵省は大規模な建造物をここに建てる計画をした。その為に将門の首塚を発掘して別の所に移す計画をした。ところが、将門の祟(たた)りを恐れて業者が入札をしない。「省としては、この入札に加わらない社には、今後省への出入り禁止」とまで言ったとか。やむを得ずA社が結果的に落札した。ところが、工事開始の当日に事故が発生して工事関係者何人かが死亡。恐れをなしたそのA社は手を引くと言い出した

これを聞いた工事担当者が「昭和の御世(実は昭和2年)になってなお、人の祟りなどを信じて工事を止めるなどケシカラン！」と声明を発表。ところがその晩に同博士は心臓マヒで死亡してしまった。恐る恐る工事は続けられたがまたも工事で数名が死亡し、またしても業者はお手あげの意思表示をした。これを知った時の大蔵大臣早坂整爾(はやさかせいじ)そのひとが直々に声明を出し、また も「昭和の御世になって・・・」と工事竣工の意志表示をした。ところがその夜、同大臣自身が急死してしまった。それによって、関係者全員がお手上げとなったのである。

やむを得、ず、将門を祀っている神田明神の宮司に来てもらって御祓いをして清めてもらうことになった。それまでの死者一四名とか。

これで済んだと思ったら、宮司の言葉は『お清めはすみました。しかし一つ条件があります、将門の塚は今後ともこの地に祀り続けること』と。そういう経緯から、今でもあの一等地にお祀りしてあるのだと言うのである。

東京都指定将門塚案内に次のようにある。

神田明神のご祭神である東国の英雄・平将門公の御首(みしるし)をお祀りしております。平将門公は、承平天慶年間(九三二～九四六)に活躍され、武士の先駆けとして関東地方の政治改革に尽力され、弱きを助け強きを挫くその性格から民衆より篤い信望を受けていました。

今を去ること一〇七五年ほどの昔、桓武天皇五代の皇胤鎮守府将軍・平良将の子将門公は、下総国に兵を起し、たちまちにして、坂東八ヶ国を平定、自ら平新王と称して政治の革新を図りましたが、平貞盛と藤原秀郷の奇襲をうけ、馬上陣頭に闘って憤死しました。

享年三十八歳、世にこれを天慶の乱といいます。その後将門公の首級は京都に送られ獄門に架けられましたが、三日後白い光を放ち、東方に飛び去り、武蔵国豊島郡芝崎に落ちました。

大地は、鳴動し太陽も光を失って暗夜のようになったとされ村人は恐怖し、塚を築いて埋葬しました。これが、この将門塚と語り伝えられています。

その後も度々、将門公の怨霊が祟りをなすため徳治二年、時宗ニ祖真教上人は、将門公に蓮阿弥陀佛という法号を追贈し、塚前に板石塔婆を建て、日輪寺にて供養し、さらに、傍の神田明神にその霊を合わせ祀ったところ、ようやく将門公の霊魂も鎮まり、この地の守護神になったと言われてい

ます。天慶の乱は平安期の中期に当たり、京都では藤原氏が政権をほしいままにし、我が世の春を謳歌していました。遠い坂東では、国々の司が私欲に走り善政を忘れ、下僚は、収奪に民の膏血(こうけつ)をしぼり、くわえて洪水や早魃が相続き、人民は食なく衣なく、その窮状は言語に絶するものでした。

その為、これらの力弱い多くの人々が、将門公によせた期待と同情とは、極めて大きなものがあり、今もって関東地方には、数多くの伝説と将門公を祀る神社があります。このことは、将門公が歴史上朝敵と呼ばれながらも、実は郷土の勇士であったことの証しです。

また、天慶の乱は、武士が台頭する烽火(のろし)であったと共に、弱きを助け強きを挫く江戸っ子の気風へと繋がり、今日の社会にも大きな影響を与えています。

江戸時代の寛文年間、この地は酒井雅楽頭の上屋敷の中庭であり、歌舞伎「先代萩」で知られる伊達騒動で伊達安芸と原田甲斐の殺害された場所でした。明治時代、大蔵省再建事業の際に崩されるなどしましたが、その後、昭和になり、史跡将門保存会が結成され、昭和三六年(一九六一)の第六次整備工事として、現況のように、整備されました。将門塚は神田明神・創建の地でもあります。

毎年九月彼岸の日には「将門塚例祭」が執り行われ、五月の神田明神の時には必ず鳳輩神輿(ほうれんみこし)が渡御して神事が行われる重要な場所です。将門塚保存会神輿も保存会の方々により担がれており、現在も同保存会により大切に維持され、神事が行われています。

参考文献　英雄伝説の謎を追う　茂在寅男

不猟つづき

伊東弓子

暑さが尾を引いているので涼しいと言ったが、本当は寒くなったのだ。夕暮れも早い。もう暗くなったかと不満をもらすが、夕食が出来る頃には「まだこんな時間だったかと、得した思いになる自分の勝手さにあきれる。創立記念日の祝いに参加しても妹のいない席を淋しい以上に悲しい思いで何度眺めたことか。将来ある職員さんと未来に育っていく幼い子たちを思いながら帰りをいそいでいると、金木犀の香りがここちよかった。

十月、かみ（ん）なづき、(陰暦十月の異名)

神々が出雲大社へ集まり、国々は神なしの付きになるという意。

神は出雲にお出かけでも、佛は常に私と共にいらっしゃる。どうか、あの人（妹）をお守りください、と願うばかり。花火大会は大成功。水面を伝わってくる音、水面に写る花火の姿、岡で高く上がるものとは全く違う。御留川で花火を見ようと呼びかけをしたが、参加者は二人だった。遠く大井戸の灯がゆらぐ。その鼻の先に”ツーン“とした鼻をつく臭い。この夏の暑さからきた悪臭か。昼は感じなかった臭いが静かさの中で人間に訴えているようだ。堤防沿いにも灯りが列をつくっていた。かすみがうら市、行方市の人が「こんな素晴らしいもの、ただで見せてもらってありがとう」という声が多かったと聞いた。それに比べて同じ市内（美野里地区）の人が、”一億（実際は、こんなにかかっていない。確かめた）も使ってもったいないこと。みんな夜空に消えちゃた。“とか、”花火に使うお金があるんなら、あの公民館にエレベータ造ってほしいよ。“とか、耳にした。玉里地区では初めての大きな催しだった。もっと心の広い人は玉造、かすみがうら、高浜、石川、三村という石岡で力合せてやるといいねという声あり。さまざま。

寒露　十月八日（旧八月廿四日）～廿三日

晩夏から初秋にかけて、秋分から十五日の夜、草々には冷たい露が結びます。

犬との散歩で堤防には、コスモスの花の群れ今年の暑さを超えて咲いている。こんな頑張りを見てほしい。又雨の強さと木を植えてない土のもろさにくずれた中学校の土手。生きた学びの場として是非生徒や先生と確かめて見て歩いて欲しいと、教頭先生に提案してみた。どう取り組んでくれたかな・・・・。

8～12日鴻雁来（こうがんきたる）

＝渡り鳥の雁が隊列を組んで、北から湖沼や池に渡ってくる頃です。秋の収穫時期で、終了後はお礼肥を施します。

13～18日（菊花開）＝秋の代表的な花、菊が咲き始める時期です。菊人形などの菊にまつわる行事が各地で開かれます。

19～23日蟋蟀在戸（きりぎりすとにあり）

＝蟋蟀（こうろぎ）が戸の辺りで鳴き始める。

何か周囲の淋しさと重なって、妹のことを思わずにいられない。どこでどうしているのだろうか。人ごみを捜すようになった。病院の窓口の所に小柄な人が立っていた。あずき色の上着に黒ズボン、黒靴、妹にそっくりの雰囲気だった。でもまもなく右手を腰に置いた姿を目にした瞬間、妹ではないと気が付いた。

霜降　十月廿四日～十一月七日、
霜降とは霜が降りる頃という意味です。北国や山間部では、早朝に気温が下がり、霜が降りて白化粧となる時期です。木枯らしはこの日から立冬までに吹く北風を言います。
いつものことながら犬との散歩は元気をもらえる。朝陽が上っていく中で絵をかいている人がいた。濃紺、青がとても美しい、どこかで見たような色。
24～28日霜始降（しもはじめてふる）＝秋が深まり、田圃にも霜が降り始める時期です。とはいえ、二十四節気に合わせた者だけに、実態には合わないものです。
29～11月2日霎時施（こさめときどきふる）＝秋が終わりになる頃で、しとしとと小雨が降ってわびしい時期となります。
3日～7日楓蔦黄（もみじつたきばむ）＝紅葉や蔦（ツタ）が黄ばむ時期です。暦の上での秋はここまでです。

十一月　しもつき、陰暦十一月の異名、霜ふり月の意、仲冬
つるべ落としの秋の暮れ、日を追うごとに、あれこれ思う人生の終わりに近いこと。もしかして身近な人との別れがあるのじゃないかなどの不安に包まれる。どこか隠れる所があればと思ったり、辛い秋。一方では甥の為に走り回る日々。老いたりといえどもという毎日明け暮れたことも事実。それもこれも健康に感謝した。あらためて父、母から貰った生命を喜んだひとときもあった。

立冬　十一月八日（旧九月廿五日）～廿一日、冬に入る最初の二十四節気、豊かな秋の稔りの時期で、冬の初めというより秋たけなわの頃。落ち葉などを集めて腐葉土を作る季節です。
「釣れますか」と、声をかけるのも自然になった。返ってくるのは「釣れないよ」「だめだよ」ばかり。それでも続けているのは何だろう。私も決まったように「楽しんでいってください」と返している。寒さはまだ厳しくない。
8～12日山茶始開（つばきはじめてひらく）＝山茶花が咲き始める時期です。山茶は中国では椿、にほんでは山茶花のことを指します。
13～17日地始凍（ちはじめてこおる）＝凍気が強まり、大地も凍り始める時期です。
18日～21日金盞香（きんせんかさく）＝冬の気配が一層強くなり、水仙の花が咲き出す時期です。金盞はスイセンのことで、花の真ん中の黄色い部分が黄金の杯に似ているからつけられた別名のようです。
釣り人の向こうに漁をしている人の姿が浮かぶ。趣味でやっている人ならいまならつれなくても、あきらめはつくだろうが、不猟の年に猟師の生活はどうだったろう。と、一人一人の姿や表情や生活を想像していた。

小雪　十一月廿二日（旧十月十日）～十二月六日、「寒さもまだ厳しくはなく、雪まだ大ならず」が「小雪」の意味です。しかし実際は雪の田よりはまだそれほど多くはなく、寒さもそれほどではない時期です。
「復習御留川」と題して「小漁場」「御留川」「御川筋」境を確認しようと計画した。以前のように各公民館、他にチラシを配ったが、参加者は三人だった。御留川のことはもう興味もなくなったのだろうか？　電話すらなかった。年老いて動く気になれないか、笛吹けど踊らず。淋しい結果で終わった。
22～26日虹蔵不見（にじかくれてみえず）＝虹は冬に陽の気が衰え、陰の気が強くなると見えなくなると考えられています。
27～12月1日朔風払葉（きたかぜこのはをはらう）＝北風が木の葉を払う時期です。本格的な木枯らしが吹き始めます。
2日～6日橘始黄（たちばなはじめてきばむ）＝橘の実がようやく黄色くなり始める時期です。
妹のことで嬉しい情報が耳に入った。二階から一階のリハビリ室に通い出したとのこと。状況はどうあれ、居場所がわかった嬉しさに涙が出た。喜びを誰に話すわけでもなく、一人土浦駅の喫茶店に向かった。この先どうあれ、明るい見通しを信じて二人で座った所で暫く時間の流れに身をまかせていた。

十二月　しわす、陰暦十二月の異名、一年の事

をし果す月であるとか。年末に家々で僧を迎え東西に奔走させる月であるとか言われる。冬至十日まえより陽がのびる。市をあげてのごみ拾い。一時より減ったように思うが、ペットボトルが細かくなってあちこち流れていき、あちこちをふさぎ、始末におえない新しい問題をおこしているという話題も増えている。

大雪　十二月七日（旧十月二十五日）～廿一日

八日は「事八日」といって、この日から正月の準備が始まるの意。一年の神事、農事を始める。終えるの意味で「こと始め」「こと納め」があります。農事は納めです。

導水事業がより身近な上玉利と高崎の辺りで行われ始めた。高浜から三村、石川の境堂辺りも大がかりに交通規制が進んでいる。霞ケ浦はどうなっていくのだろう。

7～11日閉塞成冬（そらさむくふゆとなる）＝天地の気が塞がって、真冬になる時期です。

12～16日熊蟄穴（くまあなにこもる）＝熊が冬眠するために、自分の穴に隠れる時期を言います。

17日～21日鰍魚群（さけのうおむらがる）＝鮭が群がり、河川をさかのぼっていく時期を示しています。鮭の里帰りです。

朝の堤防に車がここの所、沢山停まっている。とれる時期なのかと期待して声をかけるが、「全くだめ」「とれないよ」「今は鮒、口ぼそ、たなごだけど、だめだよ」

冬至　十二月廿二日（旧十一月十日）～一月五日）昼が一年で最も短くなる日です。

冬の季節の中間点ともいえる時期です。

残り少なくなった日々と、一年をいろんな形でかかわった人への思いが恋しい年の瀬、嬉しい知らせが耳に入った。妹と面会できるとのこと・・・今までの苦しさ、悲しさが飛んでしまった。

22～26日乃東生（なつかれくさしょうず）＝乃東（だいとう）は夏枯草（かこうそう）のことです。草木が刈れた中で、この草だけが芽を出し始めます。

27～31日麋角解（さわしかつのおつる）＝麋角とは大型の麋（かもしかの類）の角を落とす時期をさします。

1日～5日雪下出麦（ゆきくだりてむぎのびる）＝台地が降り積もった雪に覆われても、その下では麦が芽を出し始める頃です。ニンジンやごぼうなどの収穫の時期となります。

ああ！“　待ちどおしい。

妹はどんな表情で私をむかえてくれるだろう。

風と共に　《理》（33）　大輪啓展

季節毎にテーマを変えて、

今回のテーマは、「流れ」

新年明けましておめでとうございます。

また新たな一年がはじまりました。

年々日々の進む速さに驚いておりますが、本当にあっという間にと言った感じで、年明けから年越しまでを過ごしてしまいます。

まずは、1月1日に発生した能登半島地震に伴いまして、多くの方々が被害に遭い、中にはご家族を亡くされた方もいるという事で、心よりご冥福をお祈りいたします。

避難生活において不便な思いをされている方、復旧作業の為現地に赴かれている方、二次災害や体調不良に陥らないよう、十分ご注意願いたいと思います。

流れ、と言いましても、様々です。

その様々な流れについて、深く思考して行きたいと思います。

人は人から産み出され、世界の何処かに定住し、その国にともなった教育を受け、いつしか自分の選択なのか、ある一つの流れの中にあるのか、家庭を持ったり、一人で生きたり、日々なぜ何を求めて過ごしているのか。

人それぞれではありますが、活力ってなんなんでしょう。

当たり前の様に過ぎる1日を、ただなんの気なく、勿論、人それぞれ、幼児期から現在まで、状況に合わせて勉強したり、仕事したり、休んだり、遊んだり、ですが、何のために明日を願うのかがとても、不思議に思えてしまい、何か疲れているんでしょうか。

皆さんは考えた事ありますか？
今がどんな流れに乗っていて、何処を目指しているのか。
明確な目的がある時は、確かにそこを目指しているはずです。ですが、後に振り返ってみて、改めて考えてみると、本当にそうなのだろうか？他にもっと良い道はなかったのか？？

年越し早々に考える事では無いかも知れませんが、ふと頭によぎった考えをそのままに文書に載せました。

切り替えていきます。
良くも悪くも、今この時代にあって、皆さんはどんな流れに乗りたいですか？
毎度のことですが、楽して・何の苦労もせず、なんて事はありません、弛まぬ努力の元にしか幸運な波や夢見る波には乗れません。

前段では重苦し一何かを残してしまいましたので、後半は楽しくシンキングしましょう。

皆さんの小さな夢・希望は何ですか？
幸福とは、小さな事の積み重ねによる奇跡だ。と私は思っています。
例えば、想像してみて下さい、ある日男はいつもの通勤途中で、いくつもの小さな親切を他人に与えていきます。
まず、いつも雨が降った次の日は決まって空から溜水が垂れている場所があり、その落水地点にはコンクリートが剥がれていつも泥まみれになってしまうま場所には、花が植えられたプランターを置きました。
通勤途中の信号では、重い荷物を背負ったお婆さんが大変そうに横断しているのを見て、その荷物を背負って横断するのかと思えば、そのお婆さんの目的地に届けてあげたり、道端で積んだ花を売っている身なりの悪い少女には、蓄えも無くギリギリの生活をしている自分の財布から全ての花を買い、自分には不釣り合いだからと、その花を少女にプレゼントしたり、困っている誰かを見つけたり想像すると、自然と行動してしまう、側から見ればただのお人好しのこの男、実は小さな時に様々な周りの暖かい手を与えてもらった経緯によって、大病を回復し人を助けるために医者となり、僅かばかりの診療費をもとに毎日何かに親切にしているんです。

人生何が起きるか分かりませんが、裕福であったり、何不自由の無い生活だけが幸福な道とは限らないという、そんな事例を生きる男ではないでしょうか。

いつも私はこう感じます。
自分に余裕のない物は、人に構って居られないから優しくなれない、それでは余裕を持つとはどうすれば良いのか、1番分かりやすいのはお金ですよね、まずはしっかり働き金銭的な余裕を作る事、次に時間ですね。しっかり働き土台が出来たら、ゆっくり休む事の出来る時間を作る事、そして最後に健康な身体作り、お金があって時間もあったとしても、優しさを実践できる身体がなければ話になりませんから、ここまで考えるととても大変な事なんですよね、実際に先程の3点の余裕を持って実行する事は。
ですから、最初に戻ります。
それぞれがそれぞれの置かれた状況下で、弛まぬ努力を続ける事こそ、自分にとって素晴らしい幸福の流れに乗れるのです。今年こそはチャレンジしてみましょう。ではまた。

旧久昌寺跡

小林幸枝

新年おめでとうございます。
今年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

常陸太田市の西山荘と久昌寺周辺の概略図を見た時、そこに洞窟があることを発見し、大変興味を持ちましたので、現地に行って調査しました。
水戸藩の二代藩主徳川光圀の生母靖定夫人(谷久子、法号久昌院)は、水戸城下の日蓮宗経王寺に墓所が定められましたが、これを光圀が、延宝5年(1677)の十七回忌に際し、墓所を水戸徳川家墓所の瑞龍山へ移すことにしました。
この時、水戸城下の経王寺を太田の稲木村(現 常陸太田市稲木町)に移し「靖定山妙法華院久昌寺」と改称し、久昌院の菩提を弔う寺院としたのです。
この旧久昌寺跡は、小山に囲まれており、南が開かれ、現在は農地と農家が散在していました。

向かって左（東方面）に三昧堂檀林などが連なっています。また北側の奥は墓地となっていますが、この墓地は最近のもので、旧久昌寺の時代ではないそうです。
山の北側に「西山荘」があり、この東側の通路に洞窟（穴）があり、この洞窟を抜け西山荘へ行く通路だったようです。

表（入り口）

最初は、この洞窟の周りには草木が生い茂り、見えなかったのですが、ゆっくり探してとうとう見つけることが出来ました。見つけた時は、これは小冒険だと感じ、胸がワクワクしました。
これは！！　概略図に出ていた写真の穴に違いありません！！　とてもうれしく満足でした。
岩に樹木が生えており、天井は低いように見えるけど、歩いて抜いてみたら、竹林が薄っすら見えました。日の傾き具合のせいか、出口は暗いですが、穴を抜け切って穴の向こうは輝いて見えてとても美しかったです。まさにハイキングコースの通路みたいです。ただ岩穴を避けるように迂回するルートもありました。

裏（出口）

穴の写真と共「通玄洞　黄門様御成り道のトンネル」という名称が記載されている穴もあることがわかりましたが、情報は不明です。
私は、面白かったり感動したりして満足でした。

令和五年を振り返る

ヤマナカタダオ

去年は卯年でした。家族には卯年生まれはいませんでした。私は昨年一月末に、八〇歳の誕生日を迎えました。その誕生日を娘夫婦が祝ってくれて、つくば市内の和食店で、すき焼きを食べ、近くの大衆温泉で、ゆっくりとお湯に入り、幸せな気持ちになりました。
ところで、同じ年の一月末に、美浦村に住んでいた兄嫁が８７歳（老衰）で亡くなり、また秋には、実兄が８９歳でやはり老衰で亡くなりました。兄夫婦には、子供が二人いましたが、時代の流れでしょうか、この兄夫婦二人ともに家族葬でした。
私には兄弟は五人います。長兄の健一さんは亡くなりましたが、働き者で、亡くなる一か月前まで中古車販売等をして働いていました。
私は、一つの事を一生懸命に、やり遂げる性格ではなかったので、趣味はいずれも中途半端でした。しかし、義父は大正五年生まれで、尺八・書道・水彩画や詩吟も先生になり、お弟子さんも20人ほどいて老後の趣味も多彩でした。しかし、平成10年に81歳で亡くなりました。
また私は、昨年に素晴らしい方にお会いしました。その縁で、ある会に入会したのです。この素晴らしい会は、この「ふるさと風の会」です。事務所は石岡市にあり、会員は十人ほどですが、皆さん歴史の好きな方ばかりです。機関誌「ふるさと風」を発行しており、創刊から17年目の令和五年一月までは、年に12回（毎月）発行していましたが、それ以降は事情により年４回（季刊）の発行となりました。私は昨年（令和５年）４月に入会して、今までに春、夏、秋の三回投稿し、私の拙い活字が文章に仕上がった事は嬉しい限りでした。今は令和６年の冬号のためにこの文章を書いています。この「風の会」には、木村氏が文芸誌の編集と印刷を一手に引き受けてくださり、感謝しています。また昨年中の七月と十月には、勉強会と称して会員が２台の車に分乗して、行方市内の神社や寺を朝から夕方まで見学し、一緒に昼食を食べ、とても楽しい時間を過ごしました。このような見学会は一人ではきっと、一日かかっても行くことが出来なかったでしょう。木村氏は事前に念入りに見学先を調べて下さり、助かりました。
もう一人の素晴らしい男性は、水戸市在住のＭ氏です。東北大学を卒業後、私立高校の先生を勤めあげ、現在は、文筆業をしています。本も何冊か発行していて、私は短歌集を買い読んでいます。Ｍ氏は親鸞聖人の研究をして居り、私も次回は、

親鸞の事を勉強したいと思っています。
　私は、五年前から左腕が肩から上の方向に上がらないのです。機械を使って草刈りをして、丘の斜面で転んで左肩を強く打ったのが原因です。腱板断裂で、医師からは、介護認定の要支援をいただき、それ以来週一回デーサービスに行くようになりました。この施設は、月曜から土曜まで営業しており、毎日90人の老人が送迎付きで利用しています。
　私も五年目に入り、沢山の友人が出来て、楽しいです。朝9時から午後3時まで、施設を利用しています。
　令和6年の抱負としては、竜頭蛇尾に終わることなく、また画竜点睛を欠くことなく、今年は辰年なので、竜のような力強さで、目標を定めて、一人の人物を調査し、追い求め、本誌に発表する予定です。次号をお楽しみください。

【風の談話室】　《読者投稿》

やさと暮らし（75）

さと女

　何時までも暖かいと思っていたら、急に寒い等々極端すぎる日々が・・・？何かが始まる前兆なのか？怖いなァ・・・？12月半ばなのに、ここ数日暖かい日が続いている。

【10月】

・そら模様の心配な今日は石岡市民の日。竹の師匠のお手伝いで、フラワーバークでのマルシェに来ています。だんだん賑やかになって来ました。お手伝いと言っても、それ程やることはなく、竹の師匠のテントで遊んでいます。

・4年ぶりに姉の一家4人がやって来て二泊して帰って行った。一日目は秋日和で快適なお天気だったので、プチ旅行へ・・・。北茨城方面の花貫渓谷や、近くにある〝うららの湯〟で海を眺めながらゆったりした。そして二日目の今日は生憎の冷たい雨・・・それでも知人の柿農家さんに出掛け、採れたての柿を沢山買い喜んで帰った。

・Nさん家の綿花畑・・・。花のシーズンは過ぎたのか、花はちらほらしか咲いていない。此れからは、蕾から綿にと変わり、どんどん膨らんでいくでしょう。

・今年は家電がよく壊れた・・・？夏にエアコン2台作動しなくなり、買い換えまでしばらく日にちがかかるので、冷風機やサーキュレーターを買った。その後洗濯機に水漏れが判明する、とりあえず洗濯機を外に出し、床の掃除や扇風機類の始末をして、疲れて呆然としていた。其処に突然友人が、なんと手作りスイートポテトやチンジャオロース、佃煮などを持って来てくれた。何もやる気のなかった昼飯は、麺だけを茹でて、頂いたばかりのおかずで美味しく済ませた。なんとも有り難いことでした。

・コロナ過で休業状態だった近くの居酒屋さん。きのこうどんが有名、お馴染みさんから再開の催促が、そこで予約のあった時だけ開店する事に・・・。水戸からの団体さんが、きのこうどん目的にやって来た。そこで我が家も久しぶりに行ってみた。何種類も入ったキノコ、やっぱりおいしい。キノコは山形や新潟まで行って採って来たもの。山で大怪我をしたこともあるらしい。もうキノコ採りには行けない、と言っていた。

・今年も園部地区公民館の文化祭が開催されるとか・・・。〝カフェオリーブ〟のエコクラフトクラブに、出店の要請があった。其処で、クラフト体験会を提案・・・15㎝四方の箱作りを提案した。そして今年も可愛いい絵を描いてくれた園部保育所のお友達には、シャボン玉セット入りのかわいい箱をプレゼントしようと・・・オリーブさんでの集まりでは、みんなでプレゼント用の箱作りをした。喜んでもらえるかな、と皆でワクワク・・・!?

・我が家もソロソロ冬支度・・・空を見上げれば青空。トンビがまるでドローンのように、頭上を舞っている。今日は、2人して朝早くからの作業、昨年伐採した大木の枝をチェーンソーで切断して薪づくり、だいぶ先が見えて来た、此の量だと数年分はありそう・・・。夏の間、サポリにサボった庭も少し見られるようになって来た。

【11月】

・今日から始まった石岡市企画展〝関甲太郎さんの書の世界〟と〝加藤百合子さんの陶芸の世界〟大変圧巻です。陶芸作品は加藤宅を尋ねた際、庭の草木の間にさりげなく置かれていた。それらが今回は一同に展示され、それはほんと

うに見事だった。

・文化の日・・・開催の花火が上がり、園部公民館での文化祭が開幕。我々クラフトサークルも日ごろの作品を展示し、また、ロビーでは体験コーナーを設けた。沢山の方が途切れる事なく籠作り体験に参加。製作された籠を嬉しそうに持ち帰った。駐車場では焼きそば販売に朝から頑張っていた。午後は野口夫妻に寄るオカリナのコンサート。会場は展示作品いっぱいに囲まれた中でのコンサート。すごくいい雰囲気だったと、お客様とても喜んでいた。まさに、文化の日に相応しい文化祭に思わず、ありがとう・・・。クラフトサークルを続けて来られたのはオリーブさんのおかげです。いろいろな繋がりが生まれ、ありがたいです。体験コーナーも好評で、20人のかたが作られ、2人に手伝ってもらって助かりました。作品も皆さん興味をもたれいろいろ質問されました。

・柿岡商店街の今日は快晴、柿岡城まつりが賑やかに行われた。ステージでは山本恵莉子さんの司会で次々と出し物が披露され、歩行者専用になった道路には沢山の出店が並び、あちこちで餅巻きもあり、高円寺から来た阿波おどり社中、皆んな大感激・・・。途中街中出会った友人とぶらぶら歩き、また、偶然出会った知り合いも沢山いて、久しぶりに楽しい思いをした。

【12月】

・公孫樹の葉が朝日に照らされ目映い。今朝の室温は9度、ピンと張りつめた空気の中、散歩をかねて自己流体操を・・・。時折公孫樹の葉がはらはらと、道路は黄色いじゅうたん。この公孫樹の葉が落ちきると、我が家から筑波山がよく見えるようになる。

・友人宅で開催された〝中本マリジャズライブ〟に招かれた。感動の余韻が残り、昨夜も繰り返しＣＤを聴きながら枕に頭をうずめた。言葉の端々から感じる優しさ、戦地に思いを寄せながら歌ったサンフラワー（ひまわり）。マリさんも歌いながら胸が詰まって、歌詞が途切れることがあると言っていた。その思いは聴衆にも伝わり鼻をすする音が彼方此方で・・・。3時に始まったコンサートは5時半頃終わり、辺りはすっかり暗くなっていた。桧佐さんのおもてなしも凄い。ケーキが5～6種類、菊芋とれんこんのチップもたっぷりいただき、お土産にも沢山いただいて来た。さぞかし何日も前からお客様の顔を思い浮かべながら、用意されたのだと思います。楽しい時間ありがとうございました。マリさんにも感謝、感謝です。

・先日思いきって人間ドックを受けた。石岡市から2万円の補助を受けて、残り3万円弱での日帰りドックです。新しくできた共立病院健診センター（元石岡医師会病院）に40日ほど前に申し込んでいた。1日平均20人程受けているようです。場所は以前かかっていた病院なので、とてもリラックスできた。また、検査の流れもスムーズだった。後日検査結果が届き恐る恐る開けて見ると、経過観察のチェックが何項目もあり、これからの生活習慣を見直さなくては・・・。暮れからは毎年ドックを受けようと思います。

・カフェオリーブさんで〝風の会〟恒例の忘年会・・・主宰のＫさんより来年の予定が語られた。その後美味しいランチをいただきながらのお喋り。女性陣は2時間近くもの猫談義・・・5匹も飼っている二人、もう一人は家族が13年飼っていて最近亡くした。亡くした後寂しくて、黒猫を探しているとのこと。我が家の隣に真っ黒の生後6か月の猫がいる話をすると見てみたいとの事。隣にお話をしてみる・・・この猫はすばしっこく人間に触られたことがなく、メスかオスかもわからない・・・。毎日柿畑を駆け回っているので、家中で飼うのは無理だろうとの結論になり、残念ながら諦めてもらった。猫でこんなに話が盛り上がるなんて楽しい忘年会でした。おいしいランチいつもありがとう、来年もよろしくお願いします。1週間の出来事を我先にとしゃべって、手も動かしランチも完食。風の会の皆さんもランチの前に、持ち寄った和菓子をペロッと食べ、更にランチもケーキもペロッと食べる。話も弾み、だから皆さん元気なのですね。お世話になりました。よいお年をお迎え下さい。

オリーブのママさんクラフトでも毎週お世話になりました。クラフトの皆さんも元気でしたね。無事に一年が終わります。

ヒロ爺　ふるさとの風に戯れて一行に呟く

白井啓治（故）

ふるさとの風に吹かれて

「これという目的もなく歩いていると、風がやってきていろいろなことを囁き、今日の私を教えて

くれる。嬉しいとき、哀しいとき、寂しいとき、切ないとき、折々の心模様を見抜いて囁いてくれる。
風の自由自在の囁きを聞いていると、どんな自分でも納得することができる。時には意地悪な囁きもするが、それはそれで納得させられる。だから毎日、風に尋ねて散歩する。風の納得させられたら小さく自分に呟いて聞かせる。―風にのって時を漂い言葉に遊ぶ―」

・雑木林を抜けると春がいた
　　菜の花の風を黄色く塗った
・昨日　枯葉を押し上げていた竹の子
　　今日は天を突いている
・春の一本道　桃色吐息
・草取りの婆さんに道を尋ねたら横を向かれた
・今日の風は優しかった　いつもより余計に歩いた
・そんなに急いで時の使うなと雑木林のいう
・この道どこまで行くのかと春の陽に聞く
　　しぐるるまでと風のいう
・疲れたら休めと野の花のいう
・小声に歌ったら笹の葉の拍手をしてくれた
・みわたせば思い思いにふるさとの風

「季節を追ってやってきた風が、てふてふの舞に見とれてちょっと立ち止まったら春の色に染まった。黄色の風。薄紅色の風。草色の風。春の色に染まった風の、朧な月にうたれて水玉になった。水玉の風、胸のポッケに隠したら小さく弾けて恋詩の囁いた」

・しんみり雪降る　妹の夢みる
・せつなく恋心の紡いで肩のつめたく
・雪はしんしん　ひとりねる
・一人夜に　何を喰おうか夢喰おか
・春の陽に節々の伸びてうらら
・春の風に舞ったら野の花の笑顔
・夢見心地　ゆめみごごち

「ある日、日向に寝転んで考えた。風に国境があったら自由も自在も地球上からなくなってしまうのだろうな、と。次の日も日向に寝転んで考えた。今、西の窓から東の窓へ抜けていった風の奴、アメリカにとどいても西の窓から東の窓を抜けて誰かの顔を撫でていくのかな、と。
その次の日も日向に寝転んで考えた。風が全く流れを止めたら、時も、季節も移ろうことを止めてしまうのかな、と。
そのまた次の日も日向に寝転んで考えた。はてさて今日の風は…と考えをめぐらせ始めた途端、猫のボーイがやってきて、「毎日いいかげんにしろ！そこは俺の昼寝の場所だ」とパンチをくれた。
次の日、風に吹かれて散歩にと思ったら、雨の落ちて邪魔された。しばし一行に呟いて春の風の思う」

・声したら水仙花の頷いて春の風
・春の風に舞えと野の花のいふ
・むなしさを思ったら涙を流せと春の風のいふ
・声したら土筆ん坊のうなずいて春の風
・天に声して歩きたい雑木林
・爪先に小石の当たり　カララと声する
・側溝にしがみついて咲く小花
　　名は何と尋ぬるも声はなく
・雑草だって目守れば花のきれい

「風に吹かれて散歩する。風の重さや風の色に染まって、折々の心模様の一行に呟いてみる。呟いた一行の振り返れば、ふるさとの暮らしの一つの愉快」

・梅の木の打たれて小道の風急ぎ去る
・梅の木の打たれて風の声忘れ
・雑木林を抜けると春がいた
　　菜の花の風を黄色く染めた
・ピンクの髪飾り　踏みつけられて可哀そう
・木洩れ陽のとどかぬ山路一人登る
・菖蒲沢の薬師様　桜散らしておもてなし
・山桜咲く枝の見上げて薬師如来の何を想う
・黄色い風　青い風　赤い風吹いた　なつがきた
・夏に咲く恋花の夜空の染める

「風に吹かれて一本道の散歩する。
雑木林を抜けて、原を抜けて、たどり着く当てもなくへふへふと風船の風の吹くまま風の吹くまま。何処で道を返すのかは風まかせ。
風の自由自在にこの身をあずけて、心をあずけて。あるとき、そろそろ道を返そうかと思ったら、かぜの奴耳元にこっそり囁いた。

「恋は片道だよ」と。

それじゃあこの道は恋の一本道かと、恋詩の呟いて行き暮れて」

「大連のうた」を読んで

木村　進

本記事は三年前の正月に書いたブログ記事です。今また思い出してここに載せて見ます。

先日まだ緊急事態宣言が出される前のこと、笠間の方のフリーマーケットで妻が変った絵本を買ったと帰って来た。おとうさんの絵本　「大連のうた」という本である。

本はハードカバーの上製本にボックスの紙カバーに入っていた。このボックスカバーは薄汚れて、かなりボロボロだ。

しかし、中身は全く読まれた形跡もないほどきれいなままである。

妻の父（私の義父）は、大連、満州国で終戦時に旧ソ連の捕虜になり、シベリア抑留となり、日本に帰れたのは最後の頃の昭和25年頃となったと聞いている。

帰国後に妻が生まれた事になる。

義父から大連の話しは時々聞いていたらしく、本のタイトルをみて衝動的に買い求めたという。

私を含め、妻もこのシベリア抑留の頃の話は、義父は殆んど話したがらず、詳しいことは聞いていない。

昭和20年8月の日本の敗戦により約60万人の日本兵が本国へ帰れず、シベリアに連れて行かれて長い年月過酷な労働をさせられたこのソ連（ロシア）の非人道的な扱いにより、抑留者の約1割（約6万人）が現地で亡くなったと言う。

また、ソ連共産党の思想的な強制も受け、共産主義に変わった（変えられた）人間も多くいたという。

さて、この絵本は、昭和7年に大連で生れて、戦後の15歳のときまで、大連で育った「川崎忠昭」さんが、当時を思い出して、町の行事や子供時代の記憶を頼りに、30点ほどの絵を描いて、それに当時の様子を詩（文章）に書いて添えられている。

まさに子供時代を過ごして作者の感性が生き生きとよみがえってくる。

これも、きっかけは自分の子供のために残そうと考えて描かれた本だという。

日本に帰り、電車に乗り、東京「信濃町」などを通る時に、急に大連の「しなのまち」を思い出したという。

本が出版されたのが１９７８年（昭和53年）。

残念ながら作者の川崎忠昭さんは、その翌年の昭和49年に亡くなられたようだ。

まさに「おとうさんの絵本」なのかもしれない。

久々に感動した本であった。

中の絵や詩は複製、転写などができないため、見たい方は本を買い求めていただくしかないが、なかなか古本で捜してみたが、出ていなかった。

以前の販売記録では定価５８００円の本に、倍以上の値段が付いていた。

私も、本を開けて、一気に全部読んでしまった。

とても役に立った。

戦争を知らない現在の人達にも是非手にとって見てもらいたい本だ。

日露戦争で日本が勝利して、大連はロシアから日本の統治下に入った。

そして、太平洋戦争前には大勢の日本人が中国人とともに暮らしていた。

そんな暮らしの様子がよくわかる。

終戦によりロシア軍が町に入ってきた時の様子も・・・。

うん。なかなかよい本にめぐり合えた。・・・・・・作者の川崎忠昭さんの奥様は、和洋女子大学名誉教授で国文学者の「川崎キヌ子」さん。時々、この本の原画展などが行われているようだ。もし読みたい方がおられましたら、風の会の事務所に置いてありますので連絡ください。

水雲問答　（4）　（木村　進）

【はじめに】

松浦静山　甲子夜話　巻３９【１】より

これは江戸時代の（長崎）平戸藩の藩主であった松浦静山公が晩年の２０年間に毎日書き残した随筆集「甲子夜話（かっしやわ）」の中に挿入されている２人（水・雲）の手紙による問答集を理解しようとする試みです。

雲：白雲山人・板倉綽山（しゃくざん）1785～1820年　上州安中の藩主

水：墨水漁翁・林述斎（じゅっさい）：1768～1841年　儒学者で林家（幕府の大学頭）中興の祖

松浦静山・松浦　清　：1760～1841年

（13）　一心定まれば

雲：

人の言（いひ）がたきをことを云（いひ）、人の行ひがたきを致し候は、英雄と存候。一心自（みずから）定天にも勝申候。まして順を以て動申候こと、出来ぬこと有間じくと存候。

（訳）

人が言いにくいことをはっきり言って、人が行えないようなことをなし遂げる人が英雄というものでしょう。（精神を統一して）一心が定まれば、天にも勝つことでしょう。ましてその（天の）時に従って、動けば、何事も出来ないことは無いと思われます。

水：

ご尤に候。可無く間然す候。

（訳）

ごもっともに存じます。これについて何も言う事はありません。

（14）　小人の使い方

雲：

小人を御すること、余りその罪を責るときは害必（かならず）生ず。罪に復すれば、小過ありとも罪の発するを待（まち）て可也。『易』に革面、又は不悪而厳とあり。名言と存候。

（訳）

小人（しょうじん：力量のない人、地位の低い人）を御するのに、あまり罪を責めると、かならず害が起こります。罪に服させるには、小さな過ちがあっても、その罪が外に明らかになるのを待つことが良いでしょう。『（経）易』に　革面（革の掛（け）に小人革面）とあり、また「不悪而厳（にくまずして厳）」とあります。これは名言と思います。

水：

獣窮なほ戦ふ、況（いわん）や人をやと申たる通りの勢に候もの、仰せの如くご尤に存候。

（訳）

追い込まれた獣は、なお戦う（窮鼠猫を噛む）のですから、人とて同じです。この言葉にいわれている通りの勢いです。おっしゃっていることごもっともです。

（コメント）

小人革面：順を以て君に従う・・・小人は途中からいけないと思うと利賢くその自分が掲げていた面（看板）を塗り替え、おとなしく従う。

不悪而厳：君子以て小人を遠ざけ、悪（にく）まずして厳・・・小人を悪（にく）むことはしてはならない。悪（にく）むことがない厳であれ。

（15）大姦宿慝（だいかんしゅくとく）

雲：

大姦（だいかん）宿慝（しゅくとく）、其志姦邪

にして身を正道忠直に真似（まね）、人心を得候者有之。責（せむ）れば禍却って生ず。いかが処置仕り可や、伺い度候。

（訳）

大姦宿慝（たいへん悪賢しこいことが隠れていて、悪のかたまりとなっていること）、その志（こころざし）がよこしまな心であるが、身は正道忠直のような真似をして人心を得ている者がおります。しかしこれを責めれば禍がかえって生じてしまいます。どのようにしたらよろしいかお伺いいたします。

水：

君の明無き時は、人臣の力及ぶ所にあらず。

（訳）

君子が明で無きときには、部下の人臣の力の及ぶ所ではありません。

（16）　大功を成す大臣

雲：

大臣の大功を成就仕候人、率（おおむ）ね忠厚にして大事を断じ申候人やに候。漢の霍光（かくこう）、宋の韓琦（かんき）の類（たぐい）に候。何れ忠厚の二字、人臣の忘るべからざる者と存候。浮薄（ふはく）の輩は大事は成しがたく存候。只怨（うらみ）と申す一字、全く脱去仕らず候ては、人臣害を免れ中傷を脱し申候こと覚束（おぼつか）なく存候。怨の一字より、大臣忠あるも終を保ち申さず候やと存候。

（訳）

大臣の大功を成し遂げた人は、おおむね忠厚（忠にしてしかも人情が厚いこと）で大事を断行した人でしょう。漢の霍光（かくこう：前漢・武帝の名宰相）、宋の韓琦（かんき：宋時代のやはり名宰相）などの例に見ても、何れも「忠厚」の二字を人臣として忘れずにいた者と思われます。浮薄（うわっぺらで薄っぺらな）輩（やから）は大事を成し遂げることは難しいです。ただ、「怨（うらみ）」という一字、これは全て解脱しなくては、人臣はなかなか害をまぬかれ、中傷から脱することは難しいことです。この怨（うらみ）の一字のために重責を全うできない、最後まで出来なかったという者もいると思います。

（コメント：大臣が職務に忠実であっても、反対派の怨みを買ってしまい、最後までやり通すことが出来ないということがよくある。そのため、この怨みを脱しなければ職務が遂行できないということかと思います。）

水：

忠厚は特に人臣のみならず、君と雖（いえ）ども此二字なきときは事業なしがたし。人倫闊（か）くべからざるのことなり。浮薄は大事を成しがたし確論なり。怨は唐土に多くあり。此方に少し。又軽き者には多くあり。重き者には少し。大名の上にては此嫌（きらい）ますます少し。

（訳）

この忠厚ということは特に人臣だけの問題ではなく、君子といえどもこの忠厚の二字がなければ事業を成し遂げることは難しいでしょう。上も下も無く人間の関係において欠くことのできないものでしょう。浮薄（薄っぺら）であれば大事を成し遂げられないというのは確かな論でしょう。「怨み」という事案は中国（唐など）では多く、わが国には少ない。また重責に有るものには少なく、大名となれば益々少ないでしょう。

（コメント）

何か大事を成し遂げようとすれば、必ず反対派の恨みを買う。しかしこれを恐れて大事が成し遂げられないようでは困る。怨みはあるものであるが、しっかりとした考え方を持っていれば何れ理解は得られる。この時の心構えとして自分が良ければよいというような「浮薄」ではなく、「忠厚」ということを考えよということでしょうか。

（17）　識は才学より上

雲：

凡（およそ）人は才学勝れ申候も、一箇の識なくしては天下のことは了得申さず候ことやに存候。識の進方（すすめかた）、学問より外（ほか）之（これ）あるまじく、いづれ見通し申す識なくして大事は出来申すまじく候。鑑裁明断も識中より流出仕鐘楼ことと存候。

（訳）

人は才智や学問に優れているといっても、ただ一つ「識」（正しい価値判断、見識）がなければ天下の事を行うことは出来ないと存じます。識（知

識・見識）を得ることのすすめ方はやはり学問をする以外にはなく、知識を得てもそれを見通す識（見識）がなければ大事を行うことが出来ません。この見識があってこそ「鑑裁明断（かんさいめいだん）」（仕立て人が布を裁つように明らかに断定する）することも生きた学問（経験や実際の基づいた学問）による知識であることだと思います。

（コメント）

頭にいくら知識を学問をして入れても、それが生きた知識として身に付くような学問をして、実際の場面で判断することが出来る見識を身につけなければダメだということでしょうか

水：

識は才学より上たること高論の如し。識、天分に得るあり、学に得るあり、一様ならず天分識ありて学を兼る人、大事を預（あらかじ）め断ずべく、百千年のことをも議すべし。天分たらず、ようやく学によりて識を得る人、当否二偏なる所あり。

（訳）

（見）識（生きた知識）は才学より上である事はその通りであります。識というものは天分（生まれつき備わった才能）によって得られるもの、また学問をする事によっても得られるものです。これは一様ではなく、生まれつき識があってさらにその上に学問をした人にはこれから百千年のことを議論してもいいでしょう。しかし、天分が足りずに、ただ学問をして識を得た人は判断に偏るところがあります。

（コメント）

識を得るには学問をして得ることもできるが、天分がある者に敵わないといっています。天分が備わって、さらに学問をした人が最高ですが、これがなかなかいないということでもあります。天分は生まれつきですから、そういわれてもこればかりは困りますね。

（18） 大臣の任

雲：

若し人大臣の任に当りて、禍すでに萌（きざ）して防べからざることあらば、辞任仕り可や。又は禍の生（しょうずる）を待て斃（たおれ）申すこと可や、如何（いかん）。

（訳）

もし大臣の任にあって、禍（わざわい）の兆候が見えており、これを防ぐことができない場合は、辞任すべきでしょうか。又は禍が明らかになってから討ち死にすることは可でしょうか。

水：

是は至て大事。何とも申し難し。其時機に臨み候て、其決不決も亦、其人の品格だけに之れ有るべきか

（訳）

これは至って大切なことです。ただ何とも申しようがありません。その時々に応じて決める（辞める）のもまた決めない（辞めない）ことも両方可でしょう。それを決めるのは、その人の品格だけがこれに応じることが可となりましょう。

（前の問答を受けて後日）

雲：

先日申候禍萌し候節、大臣の任に居り申候論、其人の格だけに有るべしの高論感服仕候。小子の了見にて、我が手にて取りおさめ出来申候節は見切候て、取治め、出来兼ね候はば、其職に斃れ申すべく存候。初より我が手に乗らぬことと存候はば、機を見て而してたつも然るべきやと存じ申候。

（訳）

先日申し上げました禍の兆候が出ており、これを防ぐことができない時に、大臣の任にいるべきかどうかの論ですが、その人の品格によるという高論には感服いたしました。私の了見では、自分の手で取り収めることができると思われるときは見切ってやってみる。そして見込みが違って取りまとめることができなければその職とともに斃れて犠牲になると思います。また初めから自分の力ではできないと思えば、しばらく時機を計ってここぞというときに立つというのも有りかと存じます。

水：

此解甚だ精細喜ぶべし。然れども尚此上を又一層ふかく論ぜば、我が手に収まるべきと見、その時手にのらずば、我よりまさる者を薦めて救ふべし。我も人も迚（とて）も力足らずと見ば、高去遠引も然るべきか。

（訳）
この解はよく詳細に考えられており、うれしいことです。しかしながら、なお一層深く論じますれば、自分の手でできると考えてやってみたが、その後、自分の手に負えないとわかった場合には、自分より優れた者を推薦してやらせたらよいでしょう。自分もその推薦する人も力不足だと思ったら、その時は身を引いて遠く（圏外）に去ってしまうのも仕方がないでしょう。

（19） 君子自得

雲：
『中庸』に君子自得と申す語、感服仕候。いづれ人は其場所々々場所に依り申候て、了見を附け申すべきことに候。『易』の変易たるも爰（ここ）に候。時務を知り候俊傑ども之れ有、進めば時を救ひ、退けば身を保つと申度ものに候。勿論死を憂ふるは部門の恥とすることに候へども、無益に死（しに）申すも又拙（つたな）きに存候。とかく進退は潔くいたし度候。邵康節（しょうこうせつ）の、天下の事に死するは甚だ易くして、天下の事を為すは甚（はなはだ）かたし、名言と存候。

（訳）
「中庸」に君子自得（人は案外自分の境遇に応じた事しか行わないが、君子はどんな境遇でも自得している）という言葉があります。これには感服いたしました。いずれ人は置かれた環境や身分によって考えを決めるのがよろしい。これが「易」の変易ということです。その時機や時代を知っている俊傑（優れた人物）はこれに当たります。進むべき時は進んでその時の救世主となり、退くべき時は退いて身の安全を図るものです。もちろん死を恐れるのは部門の恥とする所ですが、無駄死にするのは拙いものです。ともかく進退は潔くしたいものです。邵康節（しょうこうせつ：宋の初めのころの学者で、学を修めており、大変な博識でしたが、時代が安定していたため、悠々自適な生涯を送った。もし乱世に生まれていれば天下を争っていたといわれる人物）が「天下のことに死ぬのは容易であるが、天下のことを行うのは大変難しい」と申しているのは、これは名言と思います。

（コメント）
君子自得：君子は其の位に素して行ない、その外を願わず。富貴に素しては富貴に行い、貧賤に素しては貧賤に行い、夷狄（いてき）に素しては夷狄に行い、患難に素しては患難に行う。君子入るとして自得せざるなし（中庸）
（君子は自分の境遇に応じてなすべきこと行い、それ以外の出過ぎたことはしない。富貴な身分の者はその身分にふさわしい事を行い、貧賤な身分のものはその身分に応じた事を行い、外の未開の地に在れば、そこにふさわしい事を行い、苦境の時は、その境遇でやれることをする。君子はどんな境遇に置かれようが自分を見失うことは無い「自得」しているものだ。）

水：
自得もとよりなり。事業も手に入らばそのまま行ふべし。強ひて求むべからず。生涯の事業の顕（あらは）るるなき、是は命なり。君子ここに於て学を修め、書を作りて後に垂る。孔子の末路、朱子の晩年、皆同一事なり。死は云ふまでもなし。進退さへほんのことは出来申さぬ者なり。まして死をや。

（訳）
自得ということはまことに難しいことです。事業も自然に手に入ればそのままやるべきです。無理に何かを求めてはいけません。努力しても成功せず、生涯の事業（名を成す功績など）が顕（あらわ）れないこともありますが、これは運命です。君子たるものはこのような場合には学問をして、後世のために書物を作って残します。孔子の晩年、朱子の晩年、皆そうです。死ということは云うまでもなく免れることは出来ません。自分の進むべき時、退ぞくべき時のタイミングすら難しいものですものですから、まして悔いのない死に方をするのも難しい事です。

（コメント）
この考え方でしょうね。静山公がこの「甲子夜話」を書いて残した理由がこれでわかったように思います。
そうでなければ、２０年間も書き続けることは並大抵の心構えではできないことですね。
ここでいう「自得」という言葉の理解をもう少し深めたいものです。

（続く）